群教セ	G12 - 01
	平17.228集

知的な気付きを生かし学びを深める生活科指導の工夫

── 学びを見つめる交流活動の工夫を通して ──

特別研修員　　井上 真弓　（藤岡市立鬼石小学校）

《研究の概要》

本研究は、自他のよさを見付け、対象への見方や考えを広げていくための交流活動を各過程に位置付けることによって知的な気付きを生かし、学びを深めていこうとするものである。具体的には「であう過程」において、思いや願いを伝え合い考えを交流する活動を、「追究する過程」では、取組を紹介し合い気付いたことを交流する活動を、「まとめる過程」では、学習全体を見つめ直して自他のよさを認め合う交流活動を取り入れた。

キーワード　〔生活科　知的な気付き　学びを深める　交流活動　活動の視点〕

Ⅰ　主題設定の理由

21世紀という新たな時代の中で、子どもたちを取り巻く環境は急速に変化している。これからの社会を担う子どもたちには、こうしためまぐるしい社会の変化に主体的に対応できるよう、自ら学び、自ら考えることのできる確かな力に支えられた「生きる力」の育成が求められている。

生活科では、この「生きる力」につながる自立への基礎を養うことを目標とし、思いや願いをもって主体的に対象とかかわり、具体的な活動や体験、表現する活動を通して、子どもが自ら学び、考える力を身に付けることを目指している。

生活科の授業における本学級の児童の実態を見ると、自分なりの思いや願いをもち、活動の場面では意欲的に楽しく取り組んでいる。しかし、活動の中での気付きを次の活動に取り入れ、問題を解決しながら学びを深めていける児童は少ない。指導者自身も個々の児童の気付きを見取り、気付きの自覚化を図る支援や友達のよさに目を向け対象への見方・考え方を広げ、学びを深めていけるようにするための支援に弱さがあった。そのために児童は、対象とのよりよいかかわり方や問題を解決する方法を見いだせず、活動への意欲が薄れ、対象へ深くかかわっていくことができなかったのだと考えられる。

そこで、自他の学びを見つめ、多様な見方や考え方にふれる交流活動を各学習過程に位置付け工夫することによって、対象とのかかわりの中で生まれた知的な気付きを活動の中で生かし、学びを深める指導方法を探っていきたいと考えた。

まず、「であう過程」において、思いや願いをもち、自己の活動に対する考えを明確にするための交流活動を設定する。これからの活動への見通しをもてるよう活動の視点を提示して、話合い活動を行う。児童は意見の交流によって、多様な考えに触れ、自己の活動への考えを明確にして意欲的に対象に働きかけるようになると考えた。

次に「追究する過程」において、自他の取組を見つめ、次の活動を深めていくための交流活動を設定する。活動の中で気付いた友達の取組の工夫点や改善点を視点としてカードにまとめ、相互に伝え合う活動を取り入れる。多様な考えや気付き、取組方を交流することで、自己の疑問や問題を解決するヒントを得ることができると考えた。交流活動で問題を解決する具体的な方法に気付いたり、新たな疑問をもつことで、知的な気付きを生かして、対象への見方・考え方を広げながら、一層主体的に対象に働きかけると考えた。

「まとめる過程」では、これまでの学習を振り返り、自他の活動を見つめ直す視点を示し、伝えあう交流活動を取り入れる。これにより「できた」という満足感や達成感を味わい、学習を通しての自己の成長を実感し生活の場に生かそうとすることができると考えた。

以上のような、自他の学びを見つめる交流活動を取り入れることによって、知的な気付きを生かし、学びを深めていくことができると考え本主題

を設定した。

II　研究のねらい

生活科の指導において、自他の学びを見つめ、考えや気付きを交流する活動を工夫することにより、知的な気付きを生かしながら、対象への見方や考え方を広げて学びを深めていくことができることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　「であう過程」において、活動の視点を基に、多様な考えを引き出す話合いによる交流活動を取り入れれば、自己の考えを明確にして、活動への意欲をもつことができるであろう。

2　「追究する過程」において、自他の取組の工夫・改善点を視点とし、カードを活用した交流活動を取り入れれば、知的な気付きを生かしながら、対象への見方・考え方を広げて学びを深めていくことができるであろう。

3　「まとめる過程」において、これまでの活動を見つめ直す視点を示し、カードに書かれたことを基によさを認め合う交流活動を取り入れれば、自己の学びの成果や成長を実感して自信をもって学んだことを生活の場に生かそうとするであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　知的な気付きを生かし、学びを深めるとは

知的な気付きとは、対象との深いかかわりの中で生まれる実感を伴う気付きである。知的な気付きは、次の活動を広げ、対象へのかかわりをさらに深めていくきっかけや原動力となる。知的な気付きを生かすとは、対象とのかかわりの中で生まれた発見、疑問、自他のよさなどの気付きを、価値あるものとして自覚して、次の活動をよりよくするために活用しようとすることである。気付きを知的な気付きとして価値付けることで、次の活動に対して意欲や自信をもって取り組み、対象を多面的に捉えたり（見方を広げる）発想を広げたり（考え方を広げる）しながら、様々な活動を展開することができると考える。問題を解決しようと知恵を出し、試行錯誤を繰り返しながら対象へのかかわりを深めていく。知的な気付きを生かして問題が解決できたとき「自分にもできた。」という満足感や達成感を味わうことができる。このように自己の思いの実現に向け、気付きを生かし問題を解決するために自分なりの答えを見いだし、新たな活動への思いを広げ、主体的に対象に働きかけ、対象への見方・考え方を変容させていく姿を「学びを深める姿」ととらえた。

(2)　学びを見つめる交流活動とは

対象への見方・考え方に広がりをもたせ学びを深めていくために、自他の取組を見つめて気付いたことや考えたことを交流し合う活動を見つめる交流活動を考えた。本研究では各過程に交流活動を位置付け、学びを深めていこうと考えた。また、各過程のねらいに沿って、活動の内容や方法を考えるためのヒントとなる視点や学びを見つめるための視点を提示した。視点を基に考えを明確にして、気付きや考えを交流することにより、見方や考え方が広がり学びが深まっていくと考えた。

資料1　各学習過程で示す視点

学習過程	視　　点
であう ①	いつ、どこで、だれと、なにを なんのために？どうやって？　など
追究する ②	よいところはなんだろう。こうしたらいいよ。 ちがいは、同じは？どうやって？必要なものは？なのために？　など
まとめる ③	がんばったことは？工夫したことは？できるようになったことは？どうだった？これからどうしたい？など

「であう過程」では、全体や小グループでの話合い活動を取り入れながら多様な意見を交流し合う場（みんなで考えようタイム）を設定する。活動の内容や方法を視点（資料１－①）に、互いの考えを伝え合う交流活動を取り入れれば、友達の多様な考えに触れ、活動への思いを具体的にイメージし、自己の考えを明確にして意欲的に対象に働きかけるようになるであろうと考えた。

「追究する過程」では、自他の取組の工夫・改善点を視点（資料１－②）として交流活動（キラリタイム）を設定する。視点を基に学びを見つめ、気付いたことをカードにまとめ、相互に伝え合えば、自他のよさを再認識して、疑問の解決方法を見いだすことができる。次の活動に生かしてより

よい方法を考え出せば対象への見方や考え方が広がり、学びが深まっていくであろうと考えた。

「まとめる過程」では、これまでの自分や友達の活動を振り返り、伝え合う交流の場（できたよ発表会）を設定する。活動全体を振り返るためにＶＴＲや写真を活用する。活動を見つめ直す視点（資料１－③）を基に、自他の活動はどうであったかをカードに書いて発表したり、他者からのメッセージを聞く活動を取り入れれば、自己の学びの成果や成長を実感して自信をもって学んだことを生活の場に生かそうとするであろうと考えた。

2　研究の方法

(1)　授業実践計画

対象	藤岡市立鬼石小学校　２年　30名		
期間	平成17年 10月～11月　全16時間予定	単元名	みんなであそぼう○○ランド
抽出児	A男：いろいろなことに興味を示して意欲的に活動できるが、自己の活動を見つめじっくり考えて学習していくことに課題がある。交流を通して自他の活動に目を向けるよう助言し、知的な気付きを活動で生かしながら学習を深めていけるよう支援したい。 B子：まじめに取り組み、対象への着眼点もよいが、気付きを生かして積極的に対象に働きかける点で弱さを感じる。友達との交流の中で、自分のよさを自覚し、自信をもって積極的に活動できるように支援したい。		

(2)　検証計画

検証項目	検　証　の　観　点	検証方法
見通し１	「であう過程」において、活動の視点を基に、自他の考えを交流する場を設定したことは、多様な考えに触れ、自己の考えを明確にして、○○ランド作りに意欲をもって取り組むために有効であったか。	発言内容 アイディアカード
見通し２	「追究する過程」において、自他の取組の工夫・改善点を視点としてまとめたカード（キラリカード）を活用し、伝え合う交流活動を設定したことは、遊ぶものを作る活動において知的な気付きを生かし、対象への見方・考え方を広げて学びを深めていくために有効であったか。	キラリカード
見通し３	「まとめる過程」において、○○ランド作りやみんなで遊んだことを見つめ直す視点を示し、自他の成果や成長について交流したことは、自他のよさを再認識し、自信をもって学んだことを生活の場に生かそうという気持ちをもてるようにするために有効であったか。	できたよカード

Ⅴ　研究の展開

1　単元の構想

本単元は、学習指導要領生活科編の内容（６）にあたる。友達と協力して身近にある物を使い、工夫して遊ぶ物を作ったり、遊び方を考えたりする活動を通して、１年生を招待してみんなで楽しく遊ぶことをねらいとしている。ここでは、自他の学びの交流を通して、材料の活用、作り方、遊び方などのよさに目を向け、遊びを工夫して活動に広がりや深まりをもたせようとするものである。ここでは、自己を見つめる交流活動を取り入れて、知的な気付きを生かして学びを深めていける児童の育成を目指して、本単元を設定した。

2　目標及び評価規準

目　標	自分の身近にある物を使い、工夫して遊ぶ物を作ったり、遊び方を考えたりしながら、遊びを作り出し、１年生と仲良くかかわりながら、自他のよさに気付きみんなと楽しく遊ぶことができる。		
	生活への関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・表現	身近な環境や自分についての気付き
内容のまとまりごとの評価規準	いろいろな遊びに関心をもち楽しく遊ぼうとしている。	身近にある物を使い工夫して遊ぶものを作ったり、遊びを考えたりして、１年生と一緒に楽しむとともにそれを表現できる。	身近にある物を使うなどして遊べることや、みんなで遊ぶと楽しいことに気付いている。
単元の評価規準	①身近にある物に目を向けて、自分から材料を集めたりして楽しく取り組もうとしている。 ②遊びを工夫し、みんなで仲良く遊ぼうとしている。	①材料の使い方や作り方、遊び方を工夫して気付いたことを活動に生かすことができる。 ②招待の方法を考えたり、遊び方や約束を工夫して遊びを作り出している。 ③工夫して作ったり、遊んだりしたことを表現することができる。	①身近な物を使って作ったり遊んだりすると楽しいことに気付いている。 ②遊びを通して、１年生と自分との違いや友達のよさなどに気付いている。 ③安全な道具の使い方や遊び方がわかり、マナーを守って作ったり遊んだりすることの大切さに気付いている。

3　指導計画（全16時間予定）　　【単元の評価規準との関連】

過程	時間	主な学習活動	支援及び留意点 ☆配慮を要する児童への支援	学習活動における具体的な評価規準	評価方法
であう	1	1．計画をたてよう ・みんなで遊ぶめあてをつかむ。	・１年生を招待して、一緒に楽しく遊ぶというねらいを基に、これからの活動の視点を提示し、次時までにどんなランドにしたいか、アイディアカードに書いてくるよう投げかけておく。	【関①】 ○○ランド作りの目当てをつかみ、自分たちのランド作りへの意欲がもてる。	行動観察 ・発言
	2	**みんなで考えようタイム** ・どんなランドにしたいか、自分の考えたことを発表し合う。 ・考えを交流して、自分のしたい遊びを決める。 【見通し１】	・活動の視点（資料１①）を基に、友達と考えを交流するようにする。 ・アイディアカードを基に発表された各自の作りたいものを材料・遊びの種類で分類して黒板に整理する。 ・小グループで話し合った後、新たな気付きや考えの変化が生まれ、考えを広げたり深めたりできるよう、別のグループに移動できるようにする。 ☆友達から出された考えを参考に、話合いに参加するよう促す。 ・作ってしたい遊びを決めた後、共通な考えをもつ児童同士でグループを作り、アイディアカードに決まったことを記入してこれからの活動に主体的に取り組めるようにする。	【思①】 自分と友達の考えを交流して、自分たちの○○ランドを具体的にイメージすることができる。	行動観察 アイディアカード ・記述内容
	1	・作りたいものやそれを使った遊びを表現する。	・グループでの話合いを基に、作って遊びたいものをイメージし活動に主体的に取り組めるように、作りたい遊びを絵や文で表現したり、必要な材料の量や数、遊び方について記入したりするようにする。	【思②】 自分が作って遊びたい遊びを具体的に絵や文で表現できる。	作りたい遊びの絵
追究する	4	2．準備をしよう ・友達と協力しながら自分の計画した遊ぶ物を作ったり試したりする。	・グループごとに、各自が主体的に活動に取り組み、工夫しやすいように環境を整備し、必要な道具や材料を準備しておく。 ・道具については安全な使い方の指導を全体でしてから使うようにする。	【関①】 自分の思いや願いをもち、作ったり遊んだりする活動に進んで取り組もうとしている。 【気①】 身近な物を使って作ったり遊んだりすると楽しいことに気付いている。 【気②】 安全な道具の使い方や遊び方がわかり、マナーを守って作ったり遊んだりする大切さに気付いている。	行動観察
	2	**キラリタイム** ・自分たちの作った遊びを紹介し、試しの遊びをして気付いたことを伝え合う。 【見通し２】	・試しの遊びをするときは自他の取組の工夫と改善点を視点（資料１②）として提示し、気付いたことをキラリカードにまとめ、相互に伝え次の活動に生かせるようにする。 ☆活動前に活動の視点を具体的に伝えておく。 ・個々の児童の活動のよさをＶＴＲや写真に記録しておく。写真は「キラリコーナー」として掲示し、常時気付きの交流が図れるようにする。	【気②】 作ったもので試す遊びを通して、友達と自分との違いや友達と自分の工夫や改善点に気付いている。	キラリカード ・試しの遊びをしている場面 ・記述内容
	2	・友達と協力して気付いたことを活動に取り入れながら遊ぶ物を作る。	・友達からのアドバイスを生かして、遊ぶものを工夫して作るよう促す。	【思①】 材料の使い方や作り方、遊び方を工夫して気付いたことを活動に生かすことができる。	行動観察
	1	・１年生を招待して○○ランドで、遊ぶ計画、準備をする。	・自分の考えがもてるように、楽しく遊んでもらうための必要な物、ルールなどを話し合い、準備できるようにする。	【思②】 １年生と遊ぶために必要な準備や遊びのルールを考えることができる。	行動観察
	2	・１年生を招待して、みんなで楽しく遊ぶ。	・教師も楽しく遊べていることに共感しながら共にかかわりながら遊ぶ。	【関②】 １年生や友達と楽しく遊ぼうとしている。 【気②】 遊びを通して１年生と自分との違いに気付き、友達と仲良く協力する楽しさや自他のよさに気付いている。	行動観察 ・自己評価カード
まとめる	1	**３．できたよ発表会をしよう** ・自己の活動を振り返って、気付いたことを、できたよカードに書いて発表する。　【見通し３】	・今までの活動の様子のＶＴＲや写真、１年生からのビデオレターなどを提示して、活動を見つめ直す視点（資料１③）を基に、自分たちの活動を振り返り、自他のよさに目を向けるようにする。 ☆今までの活動を順を追って想起できるように言葉かけをし、よさに気付けるようにする。	【思③】頑張ったこと、工夫したこと、できるようになったことなどについて書き、発表し合うことができる。 【気②】 活動全体を通しての自分や友達のよさに気付いている。	できたよカード ・記述内容

（詳細は資料編参照）

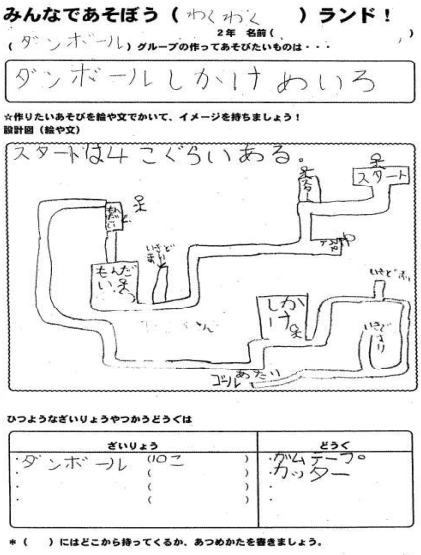
Ⅵ　研究の結果と考察

1　「であう過程」において、活動の視点を基に、自他の考えを交流する場を設定したことは、多様な考えに触れ、自己の考えを明確にして、○○ランド作りに意欲的に取り組むために有効であったか

『みんなで考えようタイム』では、アイディアカードに書き込まれたどんなランドを作りたいかというそれぞれの思いをもちよって、交流活動を行った。『いつ、どこで、だれと、なんのために、どんな』ランドにしたいかという活動の視点を提示し、考えを明確にする支援をしたところ、子どもたちからは「１年生と２年生が一緒に楽しく遊べるランドにしたい。」という思いが出された。作りたい遊ぶものとして「ボーリング」と「迷路」に意見が集中した。A男は友達の意見を聞いて「同じような遊び場ばかりだと１年生も自分たちもおもしろくない。いろいろな遊び場を作った方がよい。」という考えをもった。A男の意見をきっかけにほかの児童も自分の作りたいものだけでランド作りをするのではなく、全体のバランスを考え、みんなが楽しめるランド作りをしようという思いをもつことができた。自分の意見にみんなが賛成してくれたことで、A男は満足そうな表情を浮かべ、自分に自信をもつことができたようだった。

話合いの結果、ランド全体の遊び場として「ジャンボさかなつり」「ジャンボしかけ迷路」「しかけ忍者やしき」「ボーリング」「かんあて」を作ることになった。その後、自分の作りたい遊ぶものごとに小グループになり、遊ぶもの作りのための具体的な話合いを行った。A男は、小グループの話合いでも中心となってみんなの意見を聞いたりまとめたりすることができた。A男は、段ボールを使った迷路を作りたいという考えをもっていたが、活動の視点を基に友達と考えを交流していくうちに、「１年生が体全体を使って楽しく遊べるような大きな迷路にしたい。」「そのために大きな段ボールをたくさんつなげて作りたい。」「しかけをつけて楽しく進んでいける迷路にしたい。」など、１年生のことを配慮して考えを絞り込み、アイディアカードに材料や道具、作り方なども書き加えることができた。友達の多様な考えに触れたことで、イメージを明確にし、活動への意欲を高めていった。次の時間では、作りたい段ボール迷路の絵を描き、自分の思いを具体的に表現することができた（資料２）。

資料2　A男の作って遊びたいものの絵



B子は、いつも消極的で自分から意見を発表することが少ないが、小グループによる考えの交流の場面では、進んで自分の考えを発表する姿が見られた。活動の視点が示されたことで何をどう考えていったらよいか理解し、自信をもって意見が発表できたようだった。B子は、「段ボールを使った迷路にしかけをして、迷路の中を楽しく進んでいけるようにしたい。」という思いをアイディアカードに書いていたが、「大きなしかけ段ボール迷路を作りたい。」という似た思いをもった友達と、考えを交流することで、アイディアカードに材料や作り方などを具体的に書き込むことができた。B子は、実際に遊ぶものを作る場面で積極的に意見を言い、進んで活動できたことから、自分の意見を友達が認めてくれたことで自信をもつことができたと言える。また、友達から出された「暗いと、中がよく見えないよ。」というB子が考えていなかった意見に触れ、「天井に穴を開け明るくし、中の壁にいろいろな絵を描けば１年生が楽しく進んでいける。」という新たなアイディアを思いついた。B子も友達との交流を通して、自分の考えに広がりをもたせ、活動への見通しをもち、意欲を高めることができた。

『みんなで考えようタイム』の考えの交流によって児童全員が自分の作りたい遊びを決め、アイディアカードに自分の考えを書き込むことができた。「早く作ってみんなで楽しく遊びたい。」と、

次の時間を待ちきれずに材料を学校へもってくる児童も多く見られた。これは、活動の視点を基に考えを交流したことが、児童の考えを固め活動への意欲を一層高めるうえで有効であったと言える。

資料3　考えを交流する児童の様子

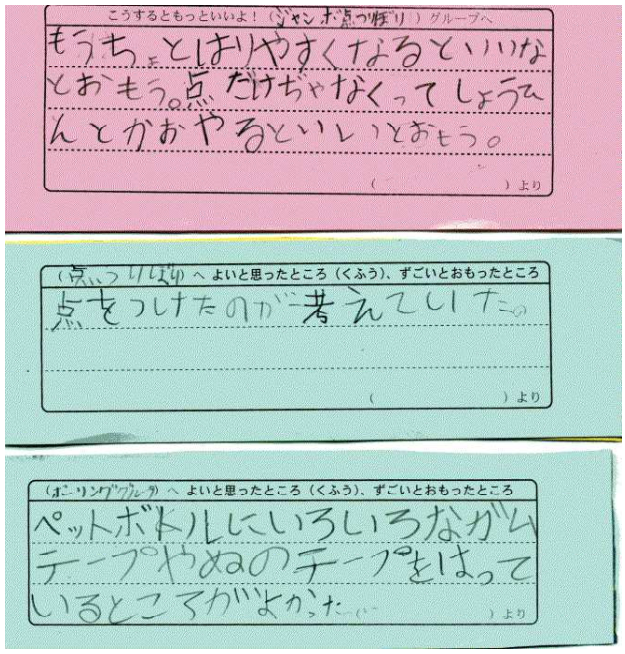
2　自他の取組の工夫･改善点を視点にまとめたカードを活用した交流活動を取り入れたことは、知的な気付きを生かしながら、対象への見方･考え方を広げて学びを深めていくために有効であったか

初めにグループごとに、自分たちの遊びについて遊び方や遊びのルール、作っていて苦労したこと、作っていて困っていることをカードに記入し発表した。次に、自分や友達の取組の工夫・改善点を見つめる視点として「作り方の工夫」「遊び方、ルールの工夫」「改善点」を基にして遊びを試す活動を行った。視点を提示したことで、ただ遊びを楽しむだけでなく､作ったものをよく見て、材料の使い方や作り方、遊び方の工夫を見付けようという意識が児童に芽生えた。遊びながら「カン当てのカンのつるし方がいいね。」「迷路のしかけが楽しいよ。」など口々に言い合いながら、繰り返し同じ場所へ行き遊びを試す児童の姿から、活動の中からほかのグループの取組への気付きが生まれていることが伺えた。

Ａ男は、４つのグループの遊びを楽しそうに試した。そして、大小２種類のペットボトルをピンに使ったボーリングの材料の工夫、カンあてのアルミホイルを丸めて作ったボールの作り方の工夫、魚釣りの魚に付けられた点数に目を向けた遊び方の工夫などに気付いた。遊びの交流後も、キラリカードに気付いたほかのグループの工夫について意欲的に記入することができた。

その後、キラリカードを基に、アドバイスしたいことをピンクのカードに、工夫したことを水色のカードに書き、交換しあった。Ａ男は「忍者屋敷はしかけを工夫するともっと楽しくなるよ。」など、自己の気付きを進んでカードに書き込みアドバイスも意欲的に行うことができた。カードの交換をしながら友達からよいアドバイスとして認められ、Ａ男自身も自己の気付きのよさを自覚することができた。Ａ男は視点を基に、友達の活動に眼を向け、作り方の工夫や改善点など、多様な考え方に触れ、自己の見方や考え方を広げることができたと言える。

資料4　児童の書いたアドバイス



Ｂ子も楽しそうにほかのグループの遊びを試した。試しながらも友達の作ったものや活動の様子をよく観察していた。交流後は、キラリカードに書いたボーリングのピンの工夫やジャンボさかなつりの遊びのルールの工夫を水色のカードに書き、積極的に友達と交換した。Ｂ子も視点を意識してほかのグループの活動に目を向け、自分たちとは違う取組のよさを見付けることができた。また、ジャンボさかなつりの遊びで気付いた「つりざおをもう少し魚につきやすくするために磁石などを使うといいよ。」というアドバイスを伝え、相手に喜んでもらえたことで自分の気付きのよさを自覚して、自信をもつこともできた。自分から進んで意見や考えを人に伝えたり、自分の思いを

表現することが少なかったＢ子であったが、学習を進めるに従って積極的になっていく姿が活動の様子や発言内容、カードの記述からも見取ることができた。

資料５　Ｂ子の書いたキラリカード

キラリカード

２年
名前

☆ともだちの作ったもので遊んで、気づいたことや思ったことをまとめましょう。

カンあて、しかけめいろ、ジャンボさかなつり、にんじゃやしき、ボーリング

グループ	作り方のくふう	あそび方	あそびのルール
	ざいりょうの使い方 かざりはどうかな？	あそびが楽しくなるためのくふうはあったかな？	なかよく、たのしくあそぶためのくふうはあったかな？
さかなつり	さかなに点が書いてあった。	つるぼうが色つきテープだった。	一人三びきぐらいとれた。
にんじゃやしき	入ぐちにわっかがないなのがあった。	休むところがあった。	ちゃんといえみたいに立ってた
ボーリング	ピンがあるところがれがかいてあった。	しょうひんが、あった。	なし

Ａ男もＢ子も同じジャンボしかけ迷路作りに取り組んでいたが、共に中をくぐっているうちに段ボールがつぶれたり倒れたりしてしまう。どうしたらよいかという問題を抱えていた。横に添えるように別の段ボールを取り付けるなど試行錯誤はしたもののなかなかうまくいかずに悩んでいた。キラリタイムのカードの交換で友達から「別の段ボールを中に付けてしきりのようにすれば、迷路も２つ分かれ道ができるし、柱みたいになって倒れにくくなるよ。」というアドバイスをもらった。Ａ男は木材を利用して柱を立てることを思いついた。二人のグループは、このアドバイスをきっかけに、解決への糸口を見いだし、次の活動への見通しをもつことができた。早く試してみたいという思いを抱き、停滞気味であった活動も一気に意欲が高まった。また、改善のために必要な材料の調達なども自主的に行い、主体的な取組も見られるようになった。次の時間の活動では、この交流活動での気付きを生かし、支えとなる柱をどのように立てるかなどの意見を出し合い、Ａ男が持ってきた木材を切って上下をガムテープで段ボールに貼り付けることになった。夢中で活動するＡ男やＢ子の様子から、知的な気付きを生かし、学びを深めていこうとしている子どもの姿を見取ることができた。

このような友達とかかわる活動や気付きを伝え合う交流活動を取り入れたことによって、作ることに没頭していた時より、自他の活動の工夫・改善点を再確認したり、アドバイスを基に新たな気付きを生み出したりして、ランド作りへの見方や考え方に広がりをもたせることができたと言える。以上のことから、活動の中で自他の学びを見つめる視点を示し、気付いた友達の取組のよいところや改善点を相互に伝え合う交流活動を設定したことは、知的な気付きを生かして、主体的な活動へと学びを深めていくために有効であったと考えられる。

３　「まとめる過程」において、これまでの活動を見つめ直す視点を示し、自他の成果や成長について交流したことは、自他のよさを再認識し、自信をもって学んだことを生活の場に生かそうという気持ちをもてるようにするために有効であったか

『できたよ発表会をしよう』では、初めにＶＴＲや写真の提示を基に、これまでの活動を見つめ直す活動を行った。活動を見つめ直す視点「頑張ったこと」「工夫したこと」「できるようになったこと」について振り返り、カード（できたよカード）に記入した。児童児童が「みんなで協力して最後まで頑張った。」「カッターの使い方が上手になった。」「段ボールが倒れないように柱を作って工夫した。」「楽しく遊ぶためのルールを工夫した。」「１年生にやさしくできた。」など、視点に沿って振り返ったことをカードに記入することができた。これは、視点を提示したことにより、自分や友達の活動への着眼点が明確化され、改めて自分やほかのグループの友達の取組のよさに気付くことができたからだと考えられる。できたよカードの記述や児童相互の発表の様子からも、視点を示し、活動を見つめ直したことで、自他の活動への見方を広げ、自分たちが一生懸命ランド作りに取り組んできたことを再認識できたことが伺えた。

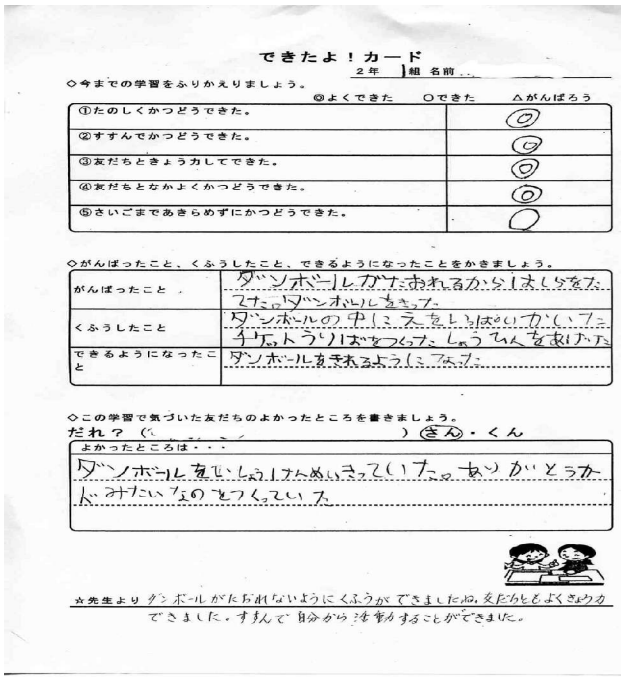
また、ビデオレターにより、「楽しかったです。また、よんで下さい。ありがとうございました。」など、１年生からの喜びの感想を伝えられ、自分たちの取組を価値あるものとして捉え、満足することもできたようだった。

Ａ男は、できたよカードに頑張ったこと「段ボールがたおれないように頑張った。」工夫したこと「はずれの迷路に鈴をつけた。」できるように

なったこと「１年生とあそべるようになった。」と書いた。キラリタイムでの気付きを生かし段ボールが倒れないように迷路の中に柱を立てたり楽しいしかけを作り１年生を楽しませたいと工夫したことを思い起こし、自己の工夫や成長を認識することができた。また、多くの友達から頑張って取り組んでいた人として名前を挙げられ、自己の取組に満足することもできたようだった。できたよカードの自己評価では、すべての欄に二重丸がつけられ、自己の活動のよさを再認識し、自信をもつことができた。

Ｂ子も積極的に自分の考えを友達に伝え、意欲的に段ボール迷路を作っている自分の姿をＶＴＲで見て、自分の活動のよさに気付くことができた。何人もの友達から「頑張って迷路を作っていたよ。」「わくわくランドでは、チケット売り場で１年生のために景品をあげたりしてがんばっていたよ。」などと評価され、自分に自信をもつこともできたようだった。今までの生活科の学習では、まじめに取り組み、よい気付きをしていたものの積極的に対象とかかわることに弱さがあったＢ子だったが、本学習後は、他の教科においても、自分から進んで意見を発表するなど積極的な姿が見られるようになった。こうしたことから、自他の成果や成長について交流活動したことは、自信をもって学んだことを生活の場に生かそうという気持ちをもてるようにするために有効であったと言える。

資料6　Ｂ子の書いたできたよカード


できたよ！カード
２年　１組　名前

◇今までの学習をふりかえりましょう。
◎よくできた　○できた　△がんばろう

①たのしくかつどうできた。	◎
②すすんでかつどうできた。	◎
③友だちときょうりょくしてできた。	◎
④友だちとなかよくかつどうできた。	◎
⑤さいごまであきらめずにかつどうできた。	◎

◇がんばったこと、くふうしたこと、できるようになったことをかきましょう。

がんばったこと	ダンボールがたおれるから１はしらをたてたこ。ダンボールをきった。
くふうしたこと	ダンボールの中に５本くらいはいりかいった。チケットうりばをつくった。しょうひんをあげた。
できるようになったこと	ダンボールをきれるようにしたこと。

◇この学習で気づいた友だちのよかったところを書きましょう。
だれ？（　　）さん・くん

よかったところは・・・
ダンボールを一しょうけんめいさっていたこと。ありがとうかんみたいなのをつくっていた。

☆先生より　ダンボールがたおれないようにくふうができましたね。友だちとよくきょうりょくできました。すすんで自分から活動することができました。

活動を見つめ直し、気付いた自他の成果や成長を交流することによって、Ａ男、Ｂ子をはじめ児童全員が、活動の初めにもった「１年生を招待してみんなで楽しくあそべるランドを作りたい。」という願いの実現を実感することができた。「ランドが作れてよかったね。」「１年生と遊んだときは、ドキドキしたよ。」「こんどは、違うランドも作りたいね。」活動後、こんな感想が子どもたちから寄せられたことからも、自分たちの取組に満足感や達成感を得ることができたことが伺えた。

休み時間に１年生を遊びに誘う姿、清掃時にやさしく声をかけて協力して取り組む姿なども見られ、今回の学習で学んだことを生活の場で生かしていこうとする様子も見取ることができた。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　各過程で視点を示したことで、活動の内容や方法、何に目を向けたらよいかを明確にして交流することができた。交流活動では自己の考えを積極的に伝え合う姿や、友達の考えや気付いたことを聞いて新たな考えをもつ児童も多く見られた。また、友達から自分のよいところを知らされたことで自己の気付きを自覚し、知的な気付きとして次の活動に生かすこともできた。交流活動をすることで、取組についてじっくり見つめ直し、遊ぶものを作るための工夫、１年生へのかかわり方などについて気付き、学びを深めていくことができた。

○　視点の提示と効果的な交流活動の方法については、様々な工夫ができると思われる。効果的なＶＴＲや写真の提示や活用の仕方を工夫して交流活動を活性化し、より学習が深まるよう努めていきたい。

＜主な参考資料＞

・嶋野　道広　編著　『評価と学習カード』
小学館(2004)
・嶋野　道広　編著　『生活科の授業』
小学館(2004)
・北尾　倫彦・万代　留里子　編著
『新評価規準表　小学校生活』
図書文化社(2002)